



東京都立工科短期大学 田中 孝男
生産管理学科

旦那的会員 短大教育においてもORに関連した科目はいくつかありますが、私のおもな職務は、生産管理実験の一部を分担することであり、ORとはあまり関係がありません。2~3年前、縁あって当学会に入会しましたが、金(会費)は出すが口(論文)は出さない旦那的立場を保っております。会員になったからには、少しはORにつながる研究をしなければと思ひ、現在、不明確な情報下での意思決定問題という、不明確なテーマに立ち入っております。研究といっても独学、独歩ですので、気楽なようですが、独善になりやすいことと、体系的な勉強の不足が原因で、効率の悪さが悩みの種です。最近も、LPの制約式の中にただ1本二次式が加わる問題をどう解くかで、さんざ悩みました。結論は簡単で、二次式を^{ラムダ}で括って目的関数に入れればよかったです。このような、数理計画法にくわしい人には常識とも思われそうなことにも、時間の浪費を重ねてしまいます。どうも、研究はなんであれ、聞きかじりの知識だけでは無理があるようです。

味の素(株) 富田 潔
システム・物流部

レクリエーションの場 電算機部門と物流管理部門が合併してできたユニークな職場、略称SD部に勤務し、システムに取り組んでおります。

一方私にとっての精神的レクリエーションの場として、OR学会の、本職と同名のSD部会に参加させていただいて、島田先生のご指導のもとに、毎週金曜の夜集まり、“SDとは何か、いかにあるべきか”を基本テーマに、ケースとして首都圏モデル作成に取り組んでおります。通勤輸送に着眼し、客観的に、ただし都市生活に関しては豊富なメンバーのキャリアを生かしてのモデルづ

くりであります。もちろん私にとっては本職のほうのSD部の仕事とも無関係でなく、大いに勉強させていただいております。

問題の発展に伴ない、多方面の展開が必要であり、同学の士のご参集を呼びかけたく、本欄を利用させていただきます。ご連絡お待ちしております。

(OR誌22 No. 4(1977) OR学会だより 参照)

日本アイ・ピー・エム(株) 真島 健一
製造工業インダストリー・サポート

ジョブ・ショップ・スケジューリング コンピュータによるスケジューリング問題の解決に従事しています。この分野ではまだ十分にコンピュータが活用されていないようですので、現場からのニーズが強い問題の一つではないかと思われまふ。現場には機械やjobの数が多く、スケジューリングの制約条件も複雑であり、かつ経済的な解決方法が要求されますが、現在のところ現実問題と理論的方法にはかなりの隔りがあります。

生産管理では順序づけの問題は、これだけ独立で考察するよりも、大日程計画から小日程計画へと展開する階層的な関係でとらえることが必要と思ひます。そこで問題解決に際しては、システムの考え方を基本にして、部分的には実用可能なシミュレーション手法でアプローチするのがより現実的ではないかと考えています。これにより現場状況の変動にも十分に応えることができるようになるのではないかと思ひます。

日本電信電話公社武蔵野電気通信研究所 橋田 温
交換方式研究室

電話網を中心とした通信ネットワークの研究に従事しています。電話網は、すでに大規模ネットワークとなっておりますが、これからも安定した成長が予想され、部品技術の動向やサービス要求の変化に対応して、トポロジーやネットワークコントロールをどうすればよいかという大きな問題があります。

データ交換網やコンピュータネットワークは待ち行列ネットワークにモデル化されますが、トポロジー、ルーティング、トラヒック設計などの問題には、数理計画法などのOR手法が適用されます。

これらに共通の問題としては、大規模ネットワークが対象のため、プログラム化も含めて既存の理論・手法をいかに適用するかということがあります。

青山学院大学
理工学部経営工学科 馬渡 鎮夫

SD関係の資料を虎穴に求む 最近、私の住んでいる市の教育行政に関心をもち、また総合的かつ計画的な都市経営の必要性を感じずようになり、7年前に入手したSD関係の著書を再び読みはじめました。しかし、SDのモデルづくりをはじめますと難問の連続です。人口部門1つを考えましても、その自然増、社会増をあらわすレイト方程式の妥当性について、なかなか確信がもてません。見かけ上で上がったモデルのシミュレーションを試してみても、“自分の無知ぶりをシミュレートしている”のでは……と心配です。

このようなときふと思いついた言葉が、“野外科学”とか“外部探検”とかいうものでした。そこで市民活動に参加しては市民意識を探り、市役所を訪問しては市の首脳部の意思決定機構を探ります。それでも不十分なので市議会を傍聴します。メモをとりながらの終日の傍聴を繰り返している姿は、市議会関係者にとって刺激的であったようです。

SDを研究するため対象としている現実のシステムを探検する際には、虎穴に虎兇を求めるときは勇気は不可欠であると信じて、市の首脳部との対話を申込むこの頃です。

宇宙開発事業団
プロジェクト管理部業務課 矢代 清高

ロケットと人工衛星開発のプロジェクトおよびまだプロジェクトにはならないような調査検討段階のものを含めた実行計画の調整と予算要求の調整業務を行なっております。

毎年2月から3月にかけては、新年度からの実行計画の調整作業、すなわち各プロジェクトを担当している人たちから計画の具体的内容について聞き、他計画との整合性、過年度からの継続性、翌年度以降の計画予定等を勘案して実行計画をつめる作業が集中します。また4月以降は計画実行前に方針が変更されたり、新たな計画がでるとその調整作業を行ないます。このような業務にはシステムの問題、計画額・スケジュール等を調整するプロジェクト管理の問題、およびその効果あるいは結果を計画時点でのどのようにとらえるかという問題が常に存在しています。このような業務の中から数理的に処理できる部分を取りだし、ORの問題としてあつかう余地があ

ると思うのですが、現在のところ時間的、能力的な制約から将来の課題としておかれています。

愛知学院大学
教養部 伊藤 二郎

定年退官後 IFORS IV(1966)に参加、その後すっかりご無沙汰いたしております。昨年4月前任校豊田高専を定年退官し、現在愛知学院大学で数学、統計学の講義を担当しています。この間主として情報処理教育関係の仕事をしました。おもな研究は、「応数情報教材の研究」(昭和46年度科研費補助総合研究B-0220)、「情報処理教育センターにおけるJOB管理システムの研究」(豊田高専研究紀要第7号、昭和49年)で、後者は教育管理のためのもので小型であることが特長であり、年間2万件におよぶセンターJOBを管理しています。この頃は「低速インターフェース結合による計算機間通信」の研究をしています。他の所属学会は、日本数学会、情報処理学会です。

電力中央研究所
経済研究所技術経済研究部 斉藤 雄志

システム科学に大切なこと 本誌 Vol. 22, No. 4はシステム研究の特集でしたが感想というよりは日頃感じていることを述べてみたいと思います。システム科学的なアプローチは工学的な対象にも社会科学の対象にも広く適用されていますが、後者に関するかぎり、いままでの成果は決して十分なものではなく、今後の見通しも明るい(?)とはいえないような気がしております。社会的な現象は定性的な関係ですから明確にとらえることがむずかしい場合が多く、しばしばシステム科学的な概念や手法の導入の段階で止まってしまうことが多いようです。複雑で未知の部分が多く明確な法則をとらえにくい現象に関してはシステム科学的に総合的にとらえようとするとかえって既知の情報さえ散逸させてしまうことさえあるのではないかと思います。

経済学、社会学、法学などの分野でもシステム科学的アプローチがその専門家によってあまり高く評価されないのは単に彼らの保守性や上記のことだけに原因があるのではなく、システム科学的アプローチをとる側にも厳密な論理の展開、きちんとした実証分析、既存の学問的知識の活用などが不十分であったことに一因があるのではないかと思います。システム科学に重要なことは対象の分野と十分融合することではないかと思います。